Osaka University Knowledge Archive

Title	中国西安・上海学術調査報告
Author(s)	戦国楚簡研究会
Citation	中国研究集刊. 2007, 45, p. 144-167
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60968
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『戦国楚簡研究２００７』（『中国研究集刊』別冊特集号（総四十五号）　平成十九年十二月　一四四―一六七頁

中国西安・上海学術調査報告

戦国楚簡研究会

一、調査旅程の概要

二〇〇七年八月二十七日から九月二日にかけて、戦国楚簡研究会は中国陝西省の西安・宝鶏（ほうけい）、および上海において学術調査を行った。

二〇〇一年以来、本研究会は、上海博物館の訪問、大阪大学における国際シンポジウムの開催、清華大学、武漢大学、台湾大学、東呉大学において開催された国際学会への参加など、国際的な学術交流を積極的に進めてきた。今回の調査は、一昨年度の湖北省荊門・荊州地区の学術調査、昨年度の湖南省長沙地区の学術調査に続き、本研究会のメンバーを中心とする共同研究「戦国楚簡の総合的研究」（科学研究費基盤研究B、二〇〇五年度～二〇〇八年度、代表者・湯浅邦弘）の一環として実施したものである。

行程は、以下の通りである。

八月二十七日　関西国際空港に集合。空路、上海を経由して、西安へ。西安泊。

八月二十八日　午前、西安城壁（南門）、大雁塔視察、午後、陝西歴史博物館訪問。夕、董仲舒墓視察。夜、研究会。西安泊。

八月二十九日　午前、陽陵博物苑訪問。午後、西安碑林見学。夜、研究会。西安泊。

八月三十日　秦俑博物館訪問。午後、始皇帝陵見学、半坡博物館訪問。夜、研究会。西安泊。

八月三十一日　西安から宝鶏に向けて移動。途中、周

写真1　学術調査参加メンバー（西安城壁にて）
（向かって左から、白・湯浅・菅本・浅野・福田哲之・竹田・福田一也）

公廟見学。午後、宝鶏青銅器博物館訪問。宝鶏泊。

九月一日　宝鶏発、西安咸陽空港から上海浦東国際空港へ。上海泊。

九月二日　上海博物館訪問。夕、上海浦東国際空港から関西国際空港へ。関西国際空港にて解散。

参加者は、本研究会設立時からのメンバーである浅野裕一（東北大学大学院）・湯浅邦弘（大阪大学大学院）・福田哲之（島根大学）・竹田健二（同）・菅本大二（梅花女子大学）に加え、通訳の白雨田（大阪大学大学院生）の六名である。この他、西安・宝鶏における調査にのみ、北京・清華大学に留学中の福田一也（日本学術振興会特別研究員）が現地で合流して同行した（写真1）。

西安・宝鶏での移動手段には専用マイクロバスを利用、中国国内での全行程に同行するスルーガイド、西安・宝鶏でのスポットガイドと併せて、予め旅行社を通じて手配した。

西安は、中国四大竈の一つに数えられ、猛暑を覚悟して臨んだが、意外にも、西安・上海とも、最高気温二十六～二十八度というしのぎやすい気温で、すべての調査

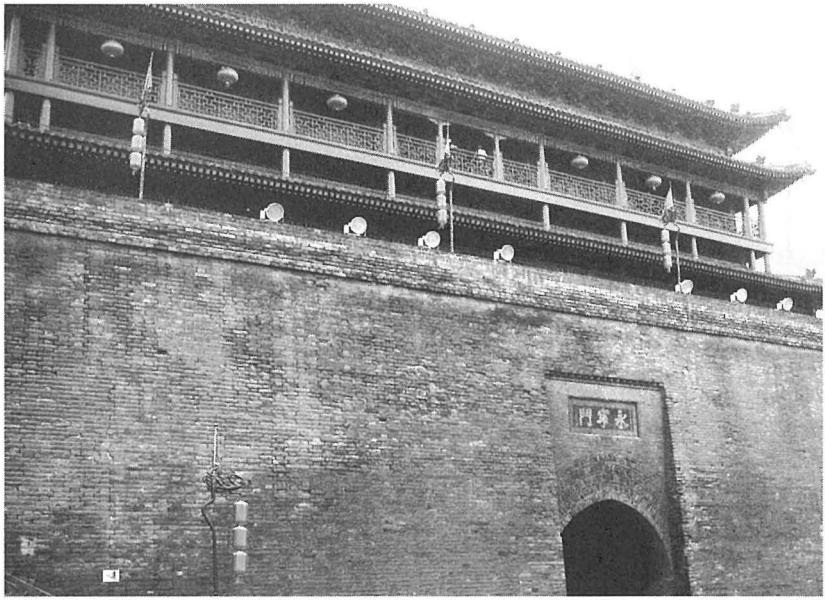

写真2　西安城壁（南門）

活動が円滑に行われ、予想以上の充実した成果を収めることができた。

なお、調査旅行の準備として、渡航一ヶ月余り前の七月中旬、訪問予定先に手紙を送り、来訪の日程と目的を伝えた。筆者（湯浅）は、各博物館の関係者とは面識がなかったが、昨年刊行した拙著『戰國楚簡與秦簡之思想史研究』（台湾・万巻楼、二〇〇六年六月）を同封して、我々が出土文献研究を積極的に推進している研究団体であることを説明し、考古文物資料の調査について協力を要請した。これに対して、各博物館からは好意的なお返事をいただいた。特に、陽陵博物苑、秦俑博物館からは懇切な返信があり、会談の具体的手順について御教示をいただいた。

（湯浅邦弘）

二、西安

調査初日の八月二十八日は、まず、宿泊先ホテル（長安城堡大酒店）の目の前にある西安城壁を視察した（写真2）。西安城壁は唐の長安城を基に明代に構築されたものである。周囲十四キロ。縦（南北）がやや短く、横（東西）がやや長い長方形を呈している。城壁の高さは十二

メートル、城壁上部の幅は十二〜十四メートル、基底部の幅は十五〜十八メートルという重厚な構え。現存する古代城壁の中では、最大規模のものである。我々が視察したのは、南門（永寧門）およびその周辺である。南門に登ると、城壁と城市の壮大な規模が実感できた。

また、南門の下には、雲梯、偏箱車、抛石機などの複製品が展示されていた。こうした古代兵器は、『武備志』『三才図会』などに画像資料は残ってはいるが、今ひとつ形を把握しにくく、ミニチュアとはいえ、これらの複製品の持つ意味は大きい。巨大な城壁と兵器のレプリカにより、古代城市をめぐる攻防戦にしばし思いを馳せた。

続いて、昼前に訪れたのは、市内の大雁塔（慈恩寺）である。慈恩寺は、唐の高祖李淵が、その母・文徳皇后を供養するために、貞観二十二年（六四八）に建立した仏教寺院である。大雁塔は、その寺院内にある高さ六十四メートルの四角七層の塔。玄奘がインドから持ち帰った仏典を保管するため、永徽三年（六五二）に建立されたものである。塔の入り口には、唐の太宗李世民が玄奘三蔵の翻訳した経典のために記した「大唐三蔵聖教序碑」と、高宗李治が記した「大唐三蔵聖教序記碑」が見られた。いずれも褚遂良の筆（楷書）である。この大雁塔は、一九六一年に国家第一級重点文物保護単位に指定されている。

午後は、大雁塔の西に位置する陝西歴史博物館を訪問した。この博物館は、一九九一年六月の開館。敷地七万平方メートル、収蔵品三十七万五千点、国家一級文物七六二件、国宝十八件を誇る、中国有数の博物館である。展示室は時代順に四室に分かれており、先史時代の彩陶、殷周時代の青銅器、漢・唐時代の金銀器、唐三彩に代表される陶俑、壁画などに特色がある。

予め、来訪の時刻を伝えていたので、我々は到着後直ちに館長室に招かれ、成建正館長と約五十分にわたって会談した（写真3）。この会談では、博物館の概要や周辺陵墓の様子などを説明していただいたが、特に興味深く感じられたのは、始皇帝陵や茂陵（前漢武帝の陵墓）の発掘計画が現時点ではないという点であった。これは、皇帝級の陵墓を軽率に発掘すべきではないという保守的精神とともに、仮に発掘した場合、予想される膨大な出土品の保存や調査が困難であるという事情によるという。ちなみに、著名な明の十三陵では、出土品の四十パーセントが亡佚したとのことであった。

また、我々の最大の関心事であった簡牘資料については、残念ながら、博物館には該当資料がないとの回答であった。これは、西安地区の気候・地質が影響し、簡牘

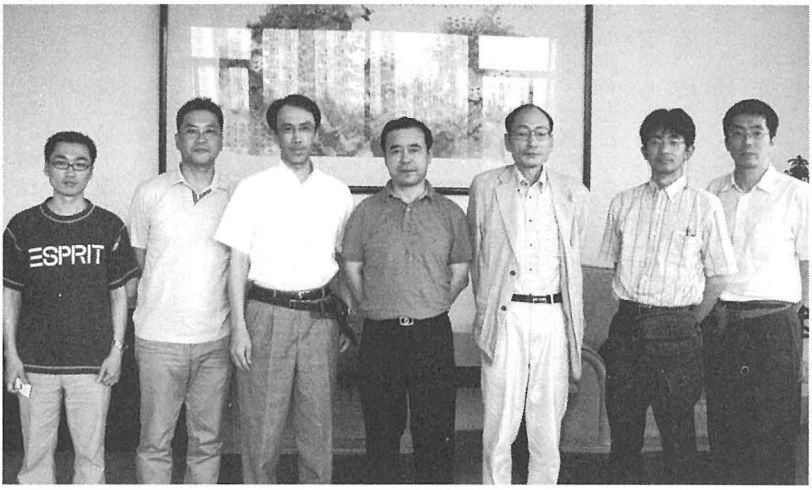

写真3　陝西歴史博物館（中央が成建正館長）

が残りにくいからであるという。簡牘資料が二千年の時を越えてよみがえるのは、湖北省・湖南省のような湿潤な地か、あるいは、極度な乾燥地帯なのである。

二時間あまりの博物館訪問を終えて、ホテルへの帰途、西安城内の董仲舒墓を視察した（後述）。

翌八月二十九日は、ホテルを午前九時に出発。約一時間で西安北郊の陽陵博物苑に到着し、晏新志館長、王保平副館長と会談した（写真4）。

一九九〇年、西安咸陽国際空港に至る高速道路を建設していた際、陽陵の陪葬坑が発見され、約十万点の文物が出土した。陽陵とは、「文景の治」として讃えられる前漢景帝（在位紀元前一五七～一四一）と王皇后の同塋異穴（墓域を同じくし墓室を異にする）合葬墓である（写真5）。陽陵博物苑はこの陪葬坑の発見を受けて創設され、大規模な発掘調査が進められた。陵苑全体は、東西約十キロ、南北一～三キロ、総面積二十平方キロメートルに及ぶ。陵区の主要な遺跡は、皇帝・皇后陵、南北の陪葬墓、建築遺跡、刑徒墓地などからなる。

一九九九年に陳列館が竣工、約二千点の出土資料の展示が始まり、二〇〇一年には全国重点文物保護単位に指定された。また、二〇〇六年には、陪葬墓の展示館が完

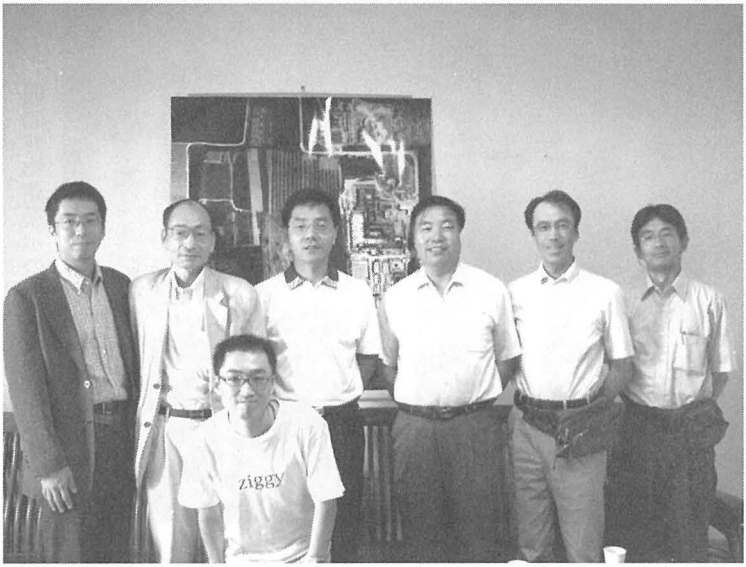

写真4　陽陵博物苑
（後列左から三番目が晏新志館長、
四番目が王保平副館長）

写真5　陽陵

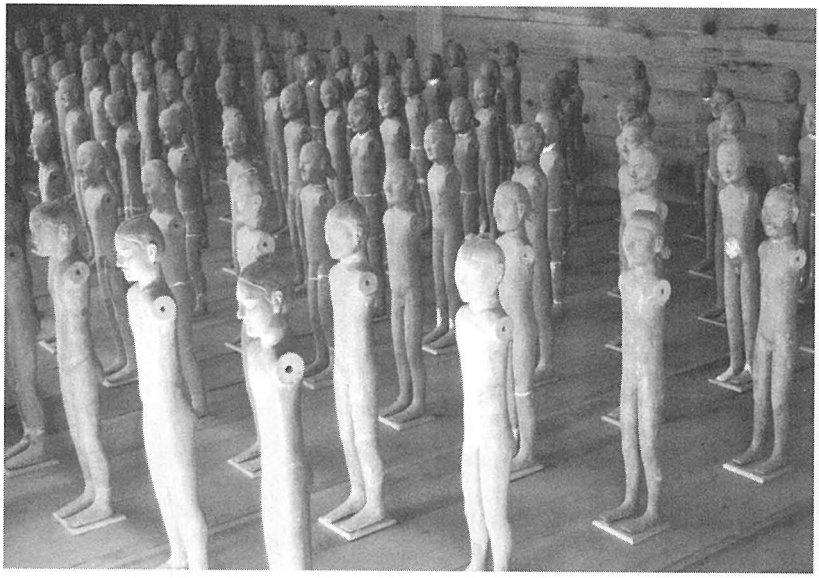

写真6　陽陵博物苑展示の人俑

成した。自然の景観を保護するため、半地下の展示室となっている。また、透明度と強度にすぐれたスロバキア製のガラスを使用し、計十三の陪葬坑の上を歩けるようになっていた。陪葬坑は最長のもので九十四メートル、第十二号坑は八メートルと短いが車馬坑となっており、車馬の複製品が置かれていた。

会談では、陽陵の概説をうかがったが、ここでもやはり簡牘資料はまったくないとのことであった。それを裏づけるのは、陪葬墓から出土した約千体の裸体俑である（写真6）。秦の兵馬俑とは異なり、約三分の一のミニチュアで、また造形的にも簡素な人俑であるが、ここで注目されたのは、すべての人俑の両腕がない点である。これは、体の部分が陶製であるのに対し、両腕は可動式の木製であったためである。もともと俑が身につけていた衣服と木製の両腕とはすべて朽ちてなくなっているのである。このことからも、この地区が簡牘資料の保存に適さない土地柄であることが改めて了解された。

その後、博物館の武子栄女史の案内で、館内の展示品、および景帝陵の南闕門を視察した（写真7）。闕門とは、陵墓を囲む方形四周の土壁の東西南北それぞれ中央に築かれた門である。一九九七年、この内の南闕門遺跡の発掘調査が行われ、二〇〇一年には、その復元・保護のた

写真7　景帝陵の南闕門

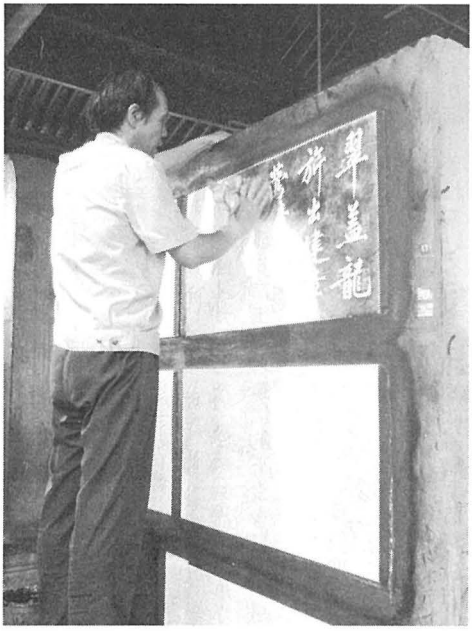

写真8　拓本製作（西安碑林博物館）

めの南闕門保護陳列庁が建設された。南闕門は景帝陵（一辺百八十メートル、高さ三十一メートル）の封土の南端から百二十メートルの地点にあった大門で、発掘された闕門としては最大規模のものである。

午後は、西安市内に帰り、碑林を見学した。ここは、もとの孔子廟を、石碑・墓碑・石刻資料の博物館としたもので、碑林そのものの創建は北宋の元祐二年（一〇八七）に遡る。一九三八年に碑林研究委員会が設立され、

写真9　秦俑博物館（左端が呉永琪館長）

一九四四年に陝西省歴史博物館として開館。その後、西北歴史陳列館、西北歴史博物館、陝西省歴史博物館と改称され、一九九三年に西安碑林博物館となって現在に至っている。

敷地内は、孔廟、碑林、石刻芸術室に区分され、総面積は三万平方メートル余り、収蔵文物は一万一千点である。この内、碑室は全七室からなり、三千五百点の石碑の内、約千点が常設展示されている。著名な開成石経（第一室）、石台孝経（石台孝経亭に別置）、熹平石経残石（第三室）、孔子廟堂碑（同）、顔氏家廟碑（第二室）などを実見したが、拓本製作の実演を見学できたのも収穫であった（写真8）。

調査三日目となる八月三十日は、ホテルを八時に出発。約一時間で、秦俑博物館に到着した。秦の兵馬俑を展示する秦俑博物館は、西安市街から東に約五十キロ、始皇帝陵の東約一・五キロの地点に位置する。

事前連絡の通り、我々のマイクロバスは、博物館の玄関に横付けするよう誘導され、すぐに呉永琪館長と面会した（写真9）。秦俑博物館については、すでに多くの資料により紹介されているので、詳細は省略するが、一九七四年三月に西安市臨潼区において発見された秦の兵馬

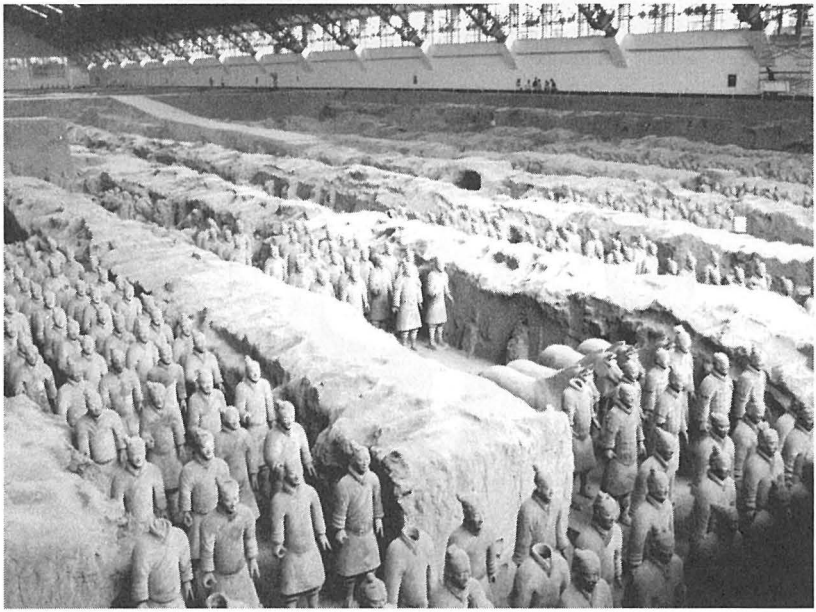

写真10　兵馬俑（一号坑）

俑は、一九八七年に中国で初めて世界遺産に登録された（現在、中国国内の世界遺産は計三十四）。出土文物は約六万点、一号坑（歩兵、車兵）、二号坑（車兵、歩兵、騎兵）、三号坑（司令部）、銅車馬坑を併せて、現在、八千体余りの兵馬俑が確認されている。

呉館長との会談では、簡牘資料について質問したところ、やはりここでも、簡牘資料は一切発見されておらず、兵馬俑が持っていたと推測される木製兵器も、すべて腐ってなくなっているとの回答であった。

会談後、研究員の秦仙梅女史の案内により、第一号坑から順に館内を視察した（写真10）。ここで我々は、一般観光客とは異なる特別観覧を許された。東西二百十メートル、南北六二メートル、深さ四・五～六メートルという最大の兵馬俑坑である一号坑は、約六千体の兵馬俑の上が体育館のような大屋根で覆われており、通常は、これを二階観覧席から見るような形になる。つまり、相当高い位置から兵馬俑を俯瞰するのである。ところが、我々は一段低い観覧席に招かれ、兵馬俑をかなり低い位置から視察できた。さらにその後、一号坑の右手奥の方に導かれた我々は、墓坑に隣接する一角に立ち入ることを許されたのである（写真11）。これにより、各俑の詳細を直接肉眼で確認でき、俑に刻まれた職工のサインと思われ

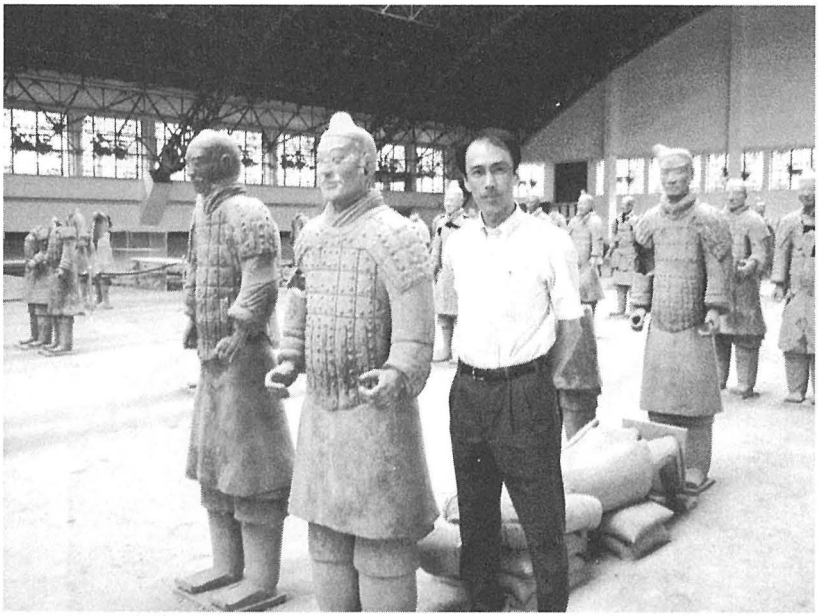

写真11　兵馬俑特別観覧

る文字も目にすることができた。兵士俑と並んでみて、初めてその大きさも実感できた。

視察を終えた後、兵馬俑の第一発見者である楊志発氏のサイン入りの図録を購入して、秦俑博物館を後にした。

なお、日本で初めて本格的な兵馬俑展が開催されたのは、一九八三年十月～十一月の大阪築城四百年まつり特別展示（大阪城公園）である。以来、規模の大小に差はあっても、幾度かの展示を重ねているが、近年開催されたものとしては、「秦の始皇帝と兵馬俑展」（二〇〇〇年三月～十月、山形美術館ほか）、「始皇帝と彩色兵馬俑展」（二〇〇六年八月～二〇〇七年七月、江戸東京博物館、京都文化博物館ほか）があり、それぞれ優れた図録が刊行されている。

昼食後は、始皇帝陵に向かった。秦俑博物館を満喫して始皇帝陵を素通りする観光客が多いためか、ここには、所々に「先拝始皇 后看兵」（始皇帝陵を参拝してから兵馬俑を見ましょう）の看板が掲げられていた。始皇帝陵は高さ七六メートルの頂上まで登れるよう石段が築かれているが、あいにくの小雨まじりの天候で、我々は墳丘の途中までで引き返した。

その後、西安市内への帰途、半坡博物館を訪問した。ここは、一九五二年に発見された新石器時代の遺跡約五

万平方メートルを、そのまま博物館としたものである。居住区、環濠、墓地などをそのまま大屋根で覆って展示している。半坡は、約六千年前の母系氏族社会の原始村落遺跡であるが、ここで注目されたのは、人面や各種記号の描かれた陶器である。陶器に記された種々の記号は、文字の起源として重要な資料である。我々は、その陶器の中でも最も著名な「彩陶人面魚文鉢」のレプリカを購入した。また、発見された二五〇余りの墓の内、北西向きに作られた成人墓群や、夫婦や家族の合葬墓の実例が見られた点などは、大きな収穫であった。

さて、この西安地区の学術調査で、多くの考古文物を実見できたわけであるが、一方で、簡牘資料はまったく目にすることができなかった。竹簡はおろか、墓坑内の棺椁や木製品すら残っていないのである。唯一の例外は、陝西歴史博物館に展示してあった秦公一号大墓の外郭の一部のみであった。文字といえば、青銅器の金文、封泥や瓦当、陶器、印章の文字であり、我々が研究している竹簡や木簡の文字資料は皆無であった。

これは、先述の通り、この地区の気候・地質が簡牘の長期保存に適さないためであり、今後、仮に始皇帝陵や陽陵、茂陵などが発掘されても、簡牘文字資料が発見される可能性は極めて低いと考えられる。そして、このことは、湖北省・湖南省から発見された大量の簡牘資料がいかに貴重なものであるかを、逆に物語っている。郭店楚墓竹簡や上博楚簡の出土は、当地の気候と地質がもたらした一つの奇跡なのである。

（湯浅邦弘）

三、董仲舒墓

八月二十八日午後、陝西歴史博物館の見学および館長との会談を終えたのは、現地時間でちょうど午後四時過ぎだった。陝西省あたりから簡牘資料が出土する見込みはないと館長に断言された我々はガックリと肩を落としつつ博物館を後にした。この日の予定はこれで終わりである。だが、ホテルに帰るには少々早い時間である。ホテルへの帰途ついでに、どこか見に行きますかという声に、「董仲舒の墓があるらしいのですが」と切り出したのは筆者であった。

今年度の中国陝西省における学術調査の中心地は、西安であった。旅客券の手配などをお願いした旅行社から送られてきた封筒には、小さく折りたたんだ「西安観光図」という日本語版の市街地図が同封されていた。市街

地に明代の城壁が残されていることは側聞していたが、どのような街かは詳しく知らなかった。少しは予習でもと思い、その市街図を開いてみると、不思議なことにまず目についたのが「董仲舒の墓」だった。西安城内の南東の端にその場所は記されていた。董仲舒といえば、前漢武帝によって行われた儒学の国教化の立役者である。中国思想史に必ず登場する思想家の一人である。『漢書』董仲舒伝によれば、彼は故郷の広川で亡くなったとされており、その子孫が茂陵に暮らしたとある。地図上では「墓」とあるが、おそらくは「廟」であり、西安の城下に祀られているというのは、やはり彼が儒教国家中国において果たした功績の大きさを物語っているのだろう。ただ、いわゆる文化大革命の批林批孔の嵐によって取り壊されなかったのだろうかという心配もあった。どのような姿で残存しているのか不明だが、もし見学できるのなら行ってみたいというのが出発前の気持ちだった。

筆者の提案はすんなりと同行メンバーには了承されたのだが、専用バスの運転手が、そんなところは知らないと言う。現体制の中国ならばさもありなんと地図を見せたのだが、ホテルに送って仕事は終わりと思っていた運転手は、行くのを渋った。近くで下ろしてくれたら後は歩いていくからということでなんとか話はつき、降ろされたのが碑林博物館の前だった。地図で見ると確かに近い。しかし、結果的にはここから優に三十分は炎天下を歩かされた。地図上では、西安城の南端の城壁を背にし、「東倉門」という通りと「和平路」という大通りにはさまれた一角に、その地点はある。途中何度か地元の人たちに確認したが、今でもあるかどうかは知らないが、地点としてはこの先だという答えだった。なんとかそれらしき場所に着いてみると、そこには人民解放軍の施設の看板が掲げてあり、その左手に重々しい屋根作りの壁面に囲まれた建物があった。見るからに「廟」である。人民解放軍の看板におびえつつ、その重々しげな建物の正門に向かってみると、門の横には「董仲所墓」という石標が建てられていた。

写真12で明らかなように、上記には「陝西省第一批重点文物保護単位」とあり、下記には「陝西省人民委員会一九五六年八月六日公布　陝西省西安市人民政府立」とあった。だが、門には「毕加索撮影基地（ピカソ撮影スタジオということか）」という看板が立てかけてあり、廟を利用して写真スタジオが営まれているようだった。その店の人に交渉して中に入らせてもらうと、廟（スタジオ）の中には写真13にあるように、董仲舒の大きな肖像画がかけてあり、今でもそこが董仲舒の廟だったという

写真12　董仲舒墓の石標

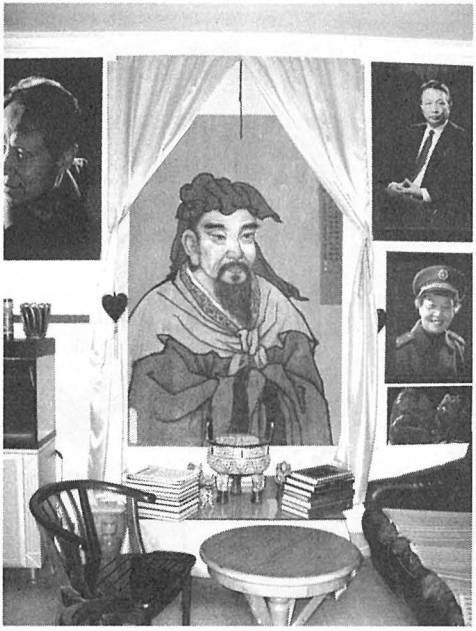

写真13　董仲舒の肖像画

自覚はあるようだった。聞けば、その建物の裏側に、董仲舒の墓はあるという。

裏手にまわると五メートル四方の壁で囲んだ中に盛り土があり（写真14）、その正面に写真では上手く写らなかったが、プラスチック板で保護された「漢董仲舒之墓」という一畳弱の石碑が建てられていた。そして、その横には何枚もの倒されたり折られたりした石碑の石板が立てかけられたり、重ねて置かれていた（写真15）。その中

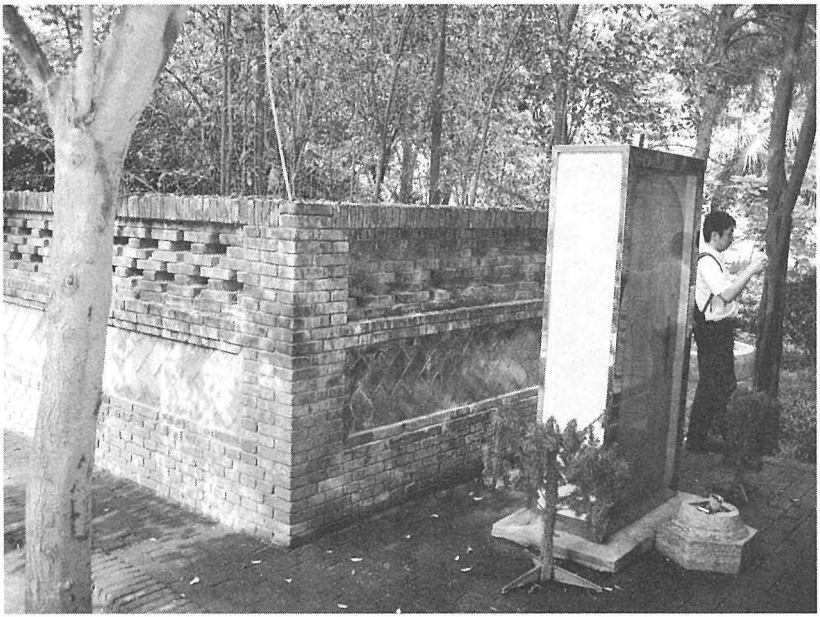

写真14　董仲舒墓

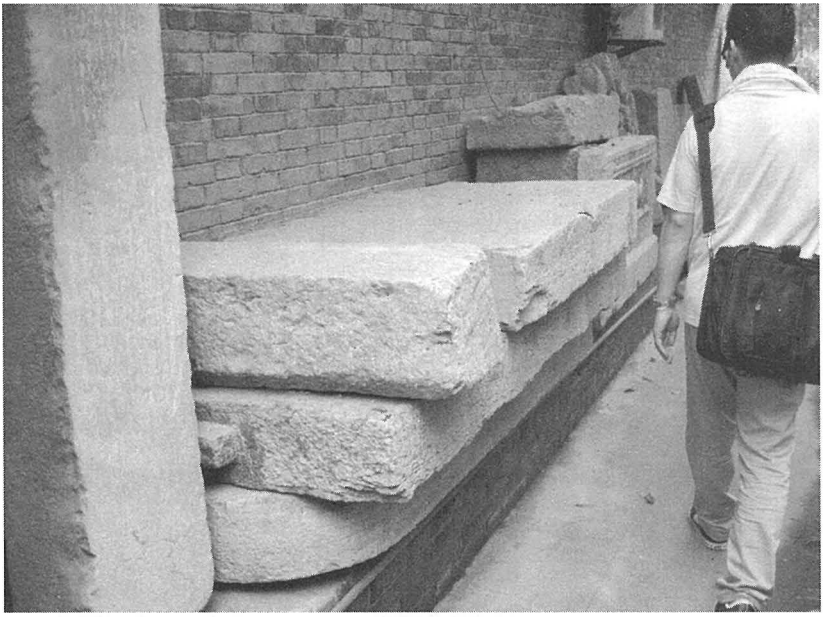

写真15　倒された石碑

写真16　「重建董子廟記」と題された石碑

に「重建董子廟記」と題された石碑文があり、ここが再建された廟であることが確認できた（図16）。残念ながら、その石碑も半分に折られており、全文は確認できなかったが、末尾に刻まれた年号は「康熙五十三年」とあった記憶がある。その記憶が正しければ、一七一四年に重建されたことになり、約三〇〇年が経過している。三〇〇年の時を経た建物かと問われれば、たしかに周囲の壁の造りや正面門の重々しさはそれなりの歴史を感じさせる風合いであった。

思いつきで訪れ、なおかつ夕刻だったこともあり、倒れた石碑などを詳しく調べることができなかった。もしもまた西安を訪れることがあれば、もう一度参詣したいと切に思わせる場所だった。ちなみにグーグルの航空写真で西安を検索し、地図に示されている辺りを見てみると、そこだけが五〇メートル四方の緑地帯として確認できた。

（菅本大二）

四、岐山周公廟

調査第四日目の八月三十一日朝、我々はマイクロバスに乗り込んで西安を離れ、小雨の降る中、高速道路を西に向かって宝鶏市へ移動した。

途中で一度高速道路を降りて、岐山県の周公廟を短時間視察した。西安から西に約一五〇キロ離れたあたりである。

「周公廟を訪れる外国人は少ない」と話す現地ガイドと運転手は、周公廟への道をよく知らなかったらしい。新しい道路が最近できたためだったのかも知れない。金所や道端で現地の人に何度も道を尋ねて、ようやく周料

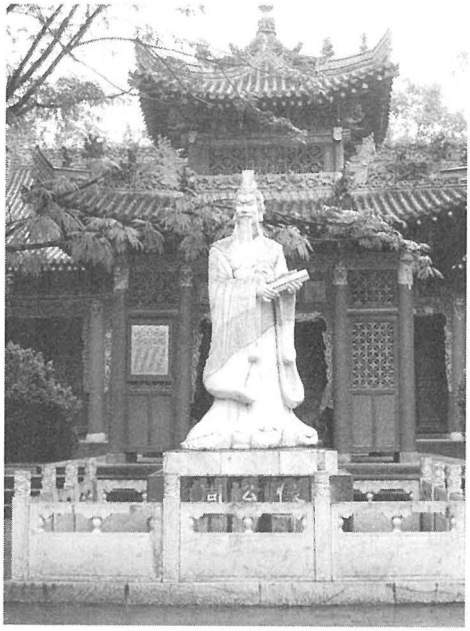

写真17　周公像　その背後は八卦亭

公廟に辿り着くことができた。道中、黄土に広がるトウモロコシ畑が見え、また既に人が住んでいなさそうな窰洞（ヤオトン）もいくつか見えた。

この周公廟は、唐の高祖が創建した周公祠が始まりだという。広い構内に入ってまっすぐ進み、一階部分が土産物屋になっている楽楼を通り抜けると、大きな周公旦の石像が建てられていた（写真17）。比較的新しいこの石像は、両手で巻物を持つ姿をしており、その巻物は、どうも竹簡を巻いたもののようである。

石像のすぐ後には、天井に易の八卦や太極の図が描かれた八卦亭があり、更に奥へ進んでいったところに、周公旦を祭る周公殿がある。案内板の記述によれば、周公殿の建物は明代に建てられたものである。

周公殿の左右には、召公と太公望呂尚とをそれぞれ祭る召公殿・太公殿が、また周公殿に向かって右手の後ろには、周の始祖とされる后稷の母・姜垣を祭る姜嫄殿が建っていた。筆者は見落としたのだが、后稷を祭る后稷殿も別にあったようだ。

周公廟のある岐山県から扶風県にかけての、周原と呼ばれる一帯は、周王朝発祥の地であり、また春秋戦国時代の秦の根拠地でもあった。付近には、大型の周墓や大量の甲骨片などが発見された周公廟遺跡、また扶風県には、その名も周原博物館があるが、今回は時間の関係で立ち寄ることができなかった。

（竹田健二）

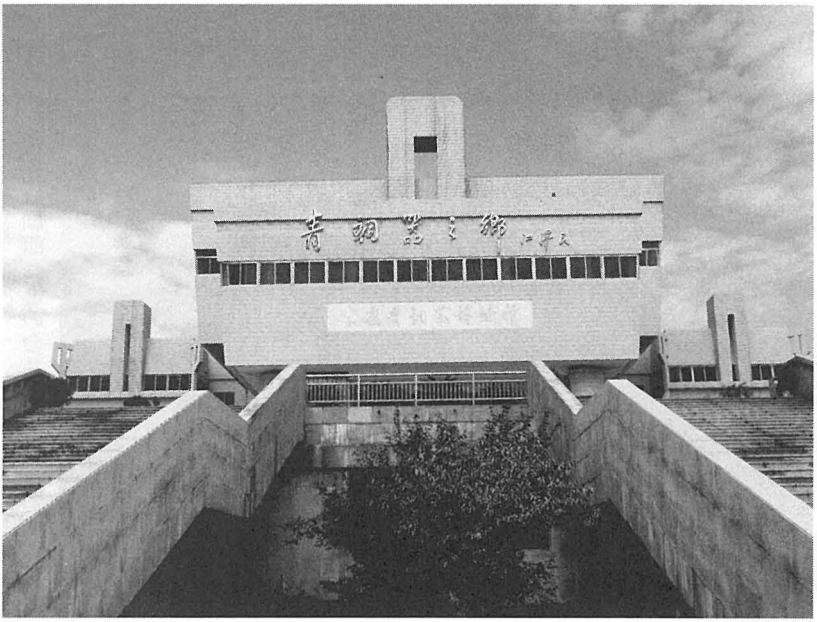

写真18　宝鶏青銅器博物館の正面

五、宝鶏青銅器博物館

周公廟の視察を終えて宝鶏市内に移動した我々は、昼食の後、宝鶏青銅器博物館を訪問した。雨は上がり、青空が広がっていた。今回の調査で、これほどきれいに晴れたのは初めてのことだ。

博物館の建物は、全体として青銅器の形を摸しており（写真18）、その壁面に掲げられている「宝鶏青銅器博物館」の館名は、郭沫若が書いたものである。博物館の古い写真を見ると、壁面にあるのはこの館名だけだが、現在は江沢民が書いた「青銅器之郷」の金色に輝く巨大な文字が、より高いところに掲げられている。

博物館では、張亜煒副館長の歓迎を受けた。張氏は、「漢字春秋―宝鶏出土文物與漢字文化展―」と題する展示を中心に、時に展示品に関する詳しい解説を交えながら、精力的に館内を案内してくださった。その後、一室に招かれて我々は張氏と会談した（写真19）。

張氏の話によると、本博物館は一九八八年、周代の青銅器を中心に約一万五千点を収蔵する宝鶏市博物館として開館、その後一九九八年に、中国初の青銅器専門の博物館となった。現在の職員数は、専門員二十八名を含めて総勢六十～七十人程度だそうだ。建物は全体的に痛み

写真19　張亜煒副館長との会談

が激しく、立て替えの計画もあるとのことである。

館内の展示品で特に興味をひかれたのは、銘文の中に「中國」の語が初めて登場するという何尊、周原で発見された甲骨文、二〇〇三年に陝西省眉県楊家村の窖蔵から出土した西周の青銅器群などである。宝鶏の近くから発見された文字資料は、こうした金文や甲骨文、或いは石鼓文や陶器に記されたものばかりで、簡牘の類はまったくない。

本博物館の代表的な収蔵品である何尊は、ガラスケースの中でターンテーブルに載せられて展示されていた(写真20)。もっとも、機械が壊れているようで回ってはいなかった。

周原で発見された甲骨は、殷墟から出土したものと比較すると、刻まれた文字が極めて微細である。肉眼ではほとんど文字が識別できないほどで、そのため展示されていた甲骨の前には、拡大するためのルーペが設置されていた。張氏の説明では、甲骨自体が細かく砕けており、完全な形で出土したものはなかったとのことである。小さな文字を、どのような道具を使って刻んだのか、またどのようにして読んだのか、そもそもなぜそのように小さく彫ったのか、こういった点などについても、まだ解明されていないそうである。

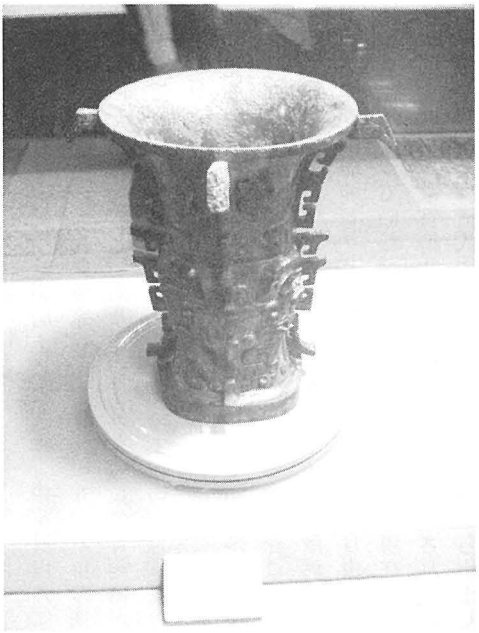

写真20　何尊

筆者が最も感銘を受けたのは、「盛世吉金―眉県楊家村出土文物特別展」として陳列されていた、楊家村の窖蔵から出土した青銅器群である。保存状態が非常によく、青銅器が本来備えていた金色の輝きを留めており、銘文もはっきりと見えた（写真21）。

楊家村の窖蔵から出土した青銅器は、鼎が十二（四十二年逨鼎―二、四十三年逨鼎―十）、鬲が九（單叔鬲）、方壺が二（單五父壺）、盤・盂・盉・匜がそれぞれ一（逨

写真21　楊家村窖蔵出土の鼎の銘文

盤・天盂・迷盉・叔五父匜）の、合計二十七である。そのすべてに銘文があり、字数の合計は四千字にものぼる。

張氏の説明によると、窖蔵から出土した青銅器は、墓から出土した副葬品、及び民間に所蔵されていたもの（古くに偶然見つかったり、或いは盗掘された後、民間に所蔵されていたもののことであろう）と比較すると、一般に状態がよく、本来の金色を留めていることがある。しかし、窖蔵から出土した青銅器にも錆が付着していることがあり、特に粉状をした錆は有害だそうである。

窖蔵から多数の青銅器が出土した例は、楊家村以外にも、一九七五年の岐山県董家村の窖蔵、一九七六年の扶風県荘白一号窖蔵などがあり、いずれも多数の青銅器が出土している（博物館内では、「岐山董家村西周青銅器窖蔵専題展」も開かれていた）。現在、博物館としては積極的な発掘調査を行ってはいないとのことであるが、今後も新たな出土によって、収蔵品は増えると予測される。

博物館の入り口付近には、大克鼎や毛公鼎、散氏盤など大型の青銅器のレプリカが置かれ、参観者が自由に触れるようになっていた。大克鼎などの実物は、現在上海博物館や台北・故宮博物院など他の場所に収蔵されているが、もともとは清代に宝鶏付近、周原一帯から出土したものである。レプリカを撫でつつ、ここは本当に「青銅器の郷」なのだと強く感じた。

（竹田健二）

六、上海博物館

九月二日、午前八時五十分、我々は今回の学術調査における最後の訪問先である上海博物館に到着した。濮茅左先生との約束は、開館時間の午前九時。入り口で待っていると、入館者にまじって濮先生が近づいてこられた。すぐにあいさつを交わし、それから館内一階の応接室で一時間半にわたってお話をうかがった。

実は、濮先生とは日本を出発する時点で連絡が取れず、はたして今回お目にかかることができるかどうか若干の不安があった。しかし、西安から一足先に上海に戻ったスルーガイドの呉穎さんのお陰で連絡がつき、昨年に続いての会見が実現したのである。

顧みれば、筆者が戦国楚簡研究会の一員としてはじめて上海博物館を訪問し、濮先生にお目にかかったのは、二〇〇一年八月であった。翌二〇〇二年八月にも続いて訪問したが、この二回の訪問のおりには、元館長の馬承源先生もお元気で、長時間にわたって我々の質問に懇切に答えてくださった。その後、二〇〇四年九月二十五日

に馬承源先生がご逝去されてからは、しばらく濮先生にもお目にかかる機会が得られなかったが、昨年八月に四年振りにお目にかかることができ、今回で四度目の会見となった。

昨年の会見についてはすでに「中国湖南省長沙学術調査報告」(『中国研究集刊』第四十一号、二〇〇六年)および「上海博物館蔵戦国楚簡「字書」に関する情報」(『中国研究集刊』第四十三号、二〇〇六年)において報告したが、今回濮先生からご提供いただいた情報は、「戦国楚簡「字書」に関する補足的な情報」と「今後公表が予定されている上博楚簡に関する情報」とに二大別される。それぞれの概要は以下の通りである。

(一) 戦国楚簡「字書」に関する補足的な情報

① 「字書」の形式は、現在の字書からは説明できず、部首の数は少なくとも数十という程度のものではない。

② 竹簡一枚に見出し字一字分が対応する形式ではなく、一枚に数字分がまたがる連写形式をもつ。

③ 「字書」の出土地は、他の上博楚簡と近い場所であると推測されるが、上海博物館の収蔵に至るまでの経緯が複雑であるため特定できない。

(二) 今後公表が予定されている上博楚簡に関する情報

① 両面にそれぞれ別種の文献が書写されている竹簡のうち、すでに正面を公表した資料の背面を新たに公表する予定である。これは背面を再利用したもので、正面とは内容的に関連しない。

② 音律に関する文献については、現在、音楽理論の研究家と箏の演奏家との二人の専門家によって整理が進行中である。二人は戦国期にこのような複雑な音律が存在したとは思わなかったと驚いていた。

濮先生は、我々の質問に答えながら、時に上博楚簡に関わるご自身の心情を吐露された。例えば、

いろいろな噂が流れ、偽物だという人もいたが、まったくとんでもない話です。竹簡を購入した段階で十分な確信があり、それは科学的な分析によっても裏付けられました。香港に流出した時の楚簡は泥まみれの状態で、にわかに真偽の判別もつかず、ゆっくり鑑定できるような時間的余裕もありませんでしたが、馬承源元館長の英断で購入が決定されたのです。私は馬承源元館長の文物鑑定家としての眼力を心から尊敬しています。

写真22　濮茅左先生（中央）との会見

写真23　濮茅左先生と研究会メンバー

との発言には、貴重な文物の流出を瀬戸際で食い止めた、馬承源先生をはじめとする関係者の見識にあらためて深い敬意を抱くとともに、学術的良心のかけらもない無責任な噂が残す傷口の深さに強い憤りを覚えた。また、

上博楚簡の整理にかかわって以来、プレッシャーも大きいです。しかし、国内外のすぐれた研究者はつねに最前線に立って研究を推進しており、私もそうしたみなさんの期待に応えたいのです。

との発言には、歴史的意義をもつ資料の整理に携わる一人の研究者としての自負と決意とを垣間見る思いがした。

最後に、濮先生が我々に語られた馬承源先生の言葉を紹介して、報告の結びとしたい。

上博楚簡の意義は、上海博物館をもう一つ建設するような大事業に匹敵する。上博楚簡の研究はこれから百年以上続き、ますます盛んになっていくだろう。

（福田哲之）